

2023年1月期 第2四半期 決算説明資料

2022年9月1日
菱洋エレクトロ株式会社

【東証プライム 証券コード：8068】

<https://www.ryoyo.co.jp>

2023年1月期 上期の概況

<半導体・デバイス関連>

- ◎ 半導体供給不足問題は期初時点でも深刻な状況にあり、年後半まで継続する見通し。
- ◎ 主力のテレビ向け案件は依然高いウェイトを占めるも、過熱感は落ち着く見通し。

<ICT・ソリューション関連>

- ◎ オンライン資格確認関連のビジネスは、前期からのスライド案件もあり、当期への貢献がピークとなる見込み。
- ◎ 一部大口ビジネスの取引形態変更により、下期以降に影響が生じる予定。

<その他>

- ◎ 23.1期から適用の「収益認識に関する会計基準」による売上高への影響額は軽微。



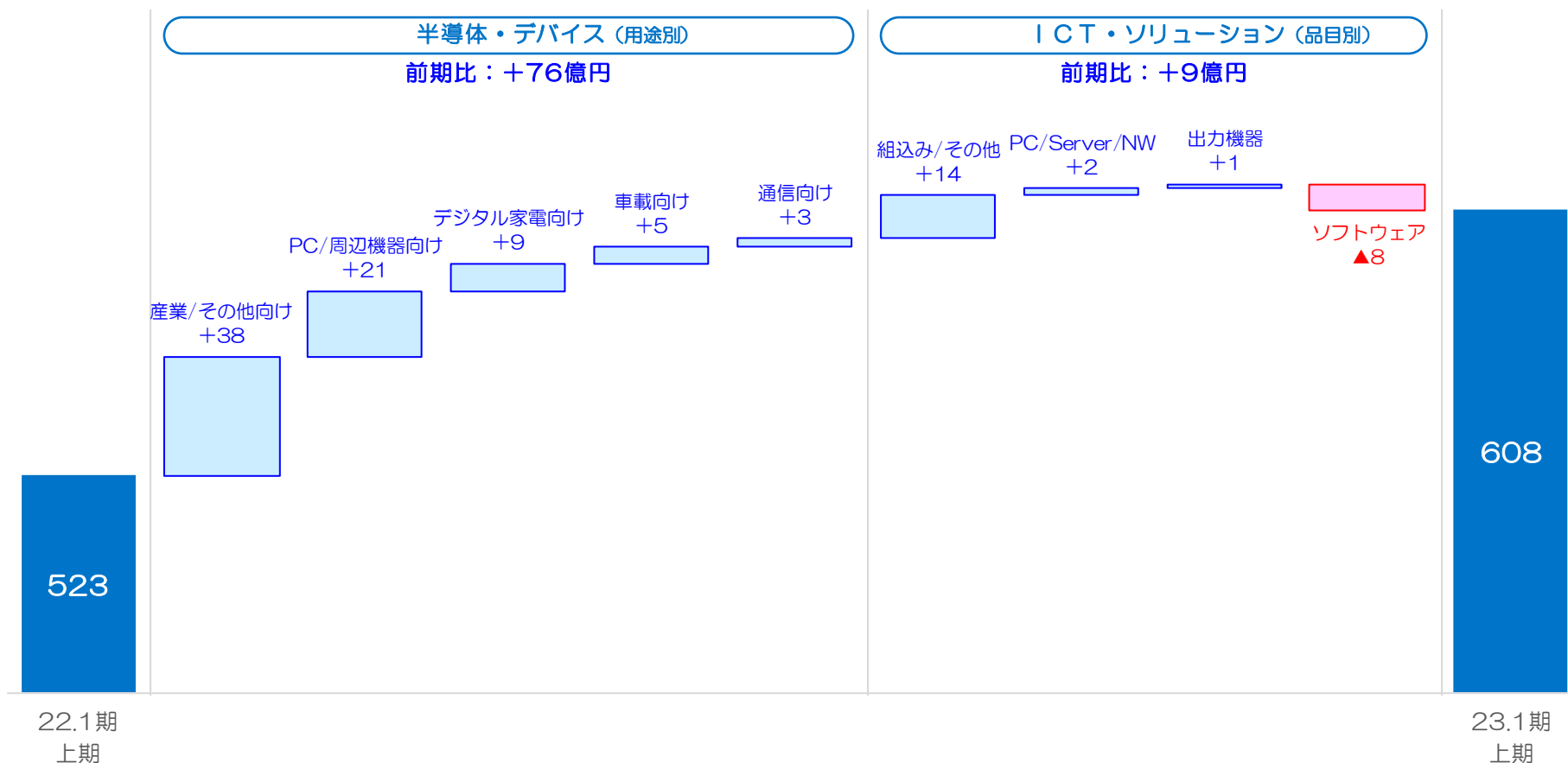
上期までは比較的堅調な推移を見込むものの、
大口ビジネスの環境変化を主要因に下期は売上・利益ともに減速見通し。

半導体関連中心に引き続き好需要に下支えされ、
当初の見通し以上に売上高・各利益ともに大きく伸長

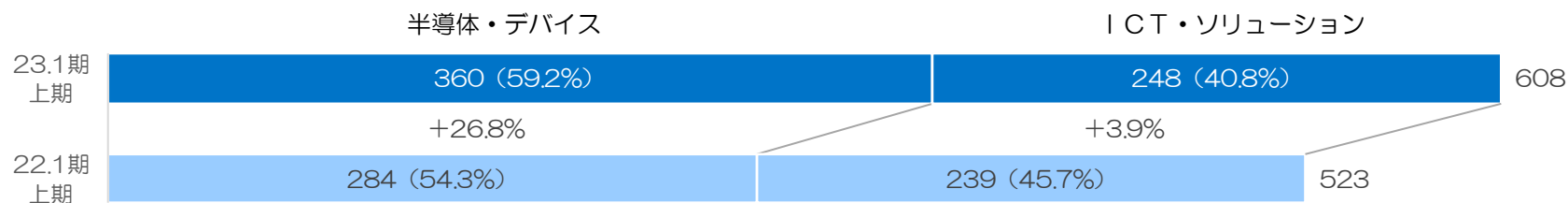
- ◎ 売上総利益率は売上構成の変化に円安進行の恩恵も加わり、11%超の水準に。
- ◎ 営業利益・経常利益・四半期純利益は、前期実績から倍増以上の水準で着地。

(単位：億円)	22.1期 上 期 (実 績)	23.1期 上 期 (実 績)	対 前年同期	
			増減額	増減率
売上高	523	608	+85	+16.4%
売上総利益	49.8	67.4	+17.5	+35.2%
(率)	9.5%	11.1%		
販管費	40.3	42.2	+1.9	+4.7%
営業利益	9.5	25.1	+15.6	+164.7%
(率)	1.8%	4.1%		
経常利益	11.3	24.8	+13.5	+120.2%
親会社株主に帰属する四半期純利益	8.3	17.8	+9.5	+114.5%

- ◎ 半導体・デバイスは、すべての用途で前期実績を上回る着地となり、なかでも、産業分野向けやPC/周辺機器向けが堅調に推移。
- ◎ ICT・ソリューションは、収益認識基準変更の影響が生じたソフトウェアを除き、各品目とも引き続き高水準で推移。



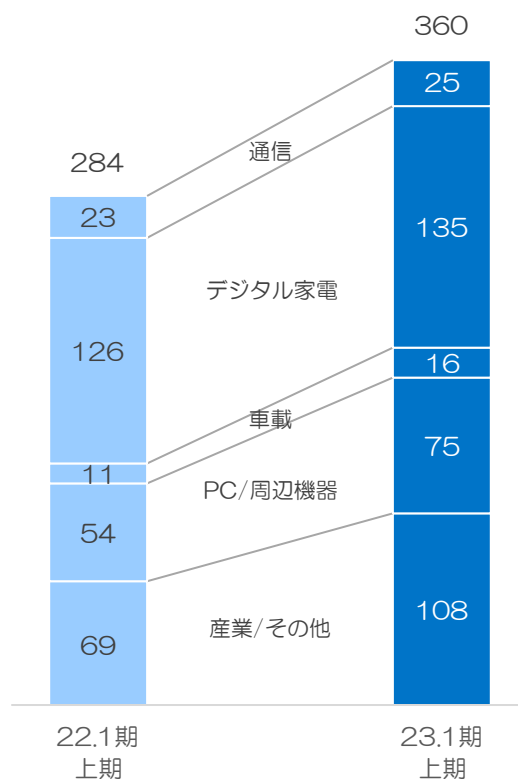
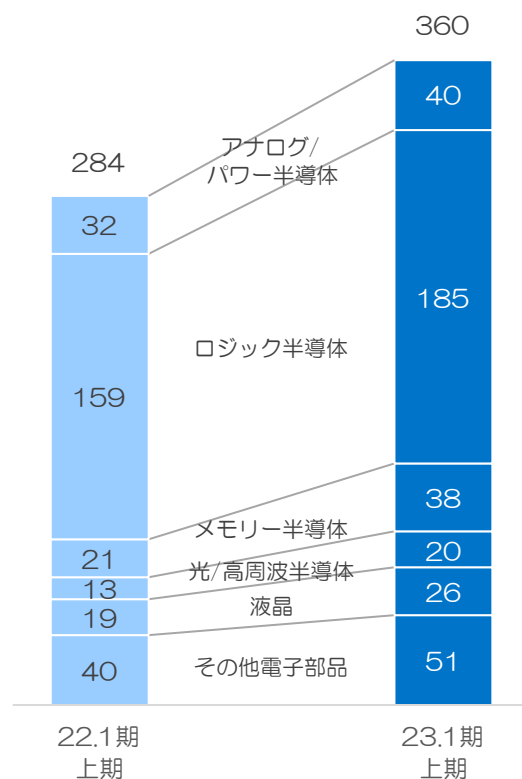
<補 足> 品目別の状況



半導体・デバイス

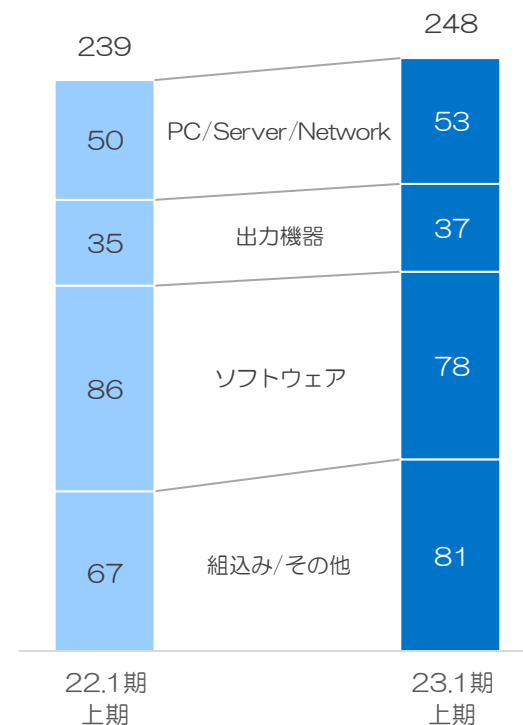
<品目別>

<用途別>



ICT・ソリューション

<品目別>



上期業績のポイントと下期見通しについて

上期の好業績の主な背景

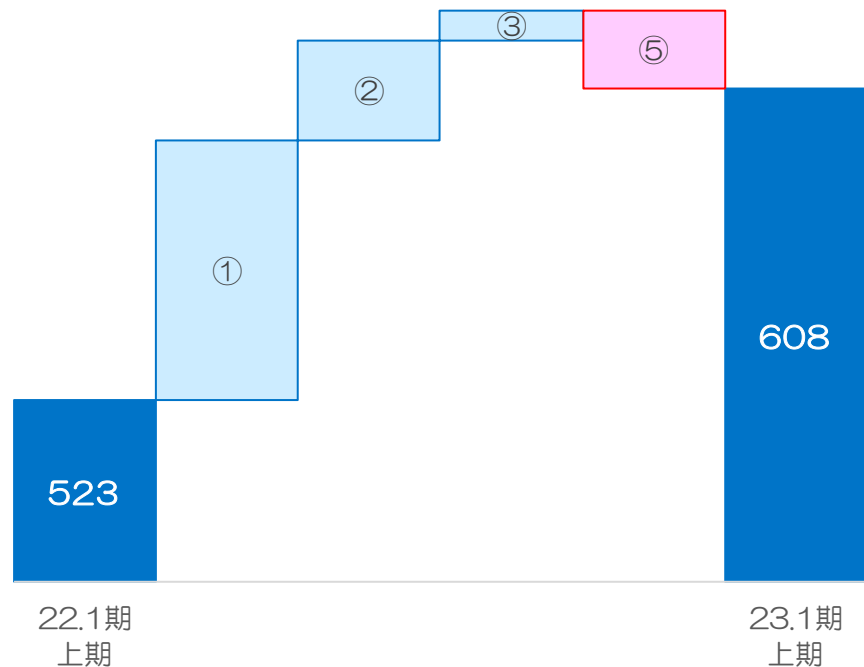
半導体供給不足下における
旺盛な需要の下支え

為替変動（急激な円安進行）による
利益の押し上げ

赤字寸前(18.1期)からの改革の成果
（営業力強化に伴う案件の増加）

主な要因	影響度合い	
	売上高	営業利益
対 前年同期比	+85億円	+15.6億円
① ベースビジネス（半導体供給不足下における需要増を含む）		
② 半導体供給不足下におけるスポット案件		
③ 特定要因による一過性ビジネス		
④ 為替変動による影響	—	
⑤ 新収益認識基準の適用による影響		—
⑥ 販管費の増加	—	

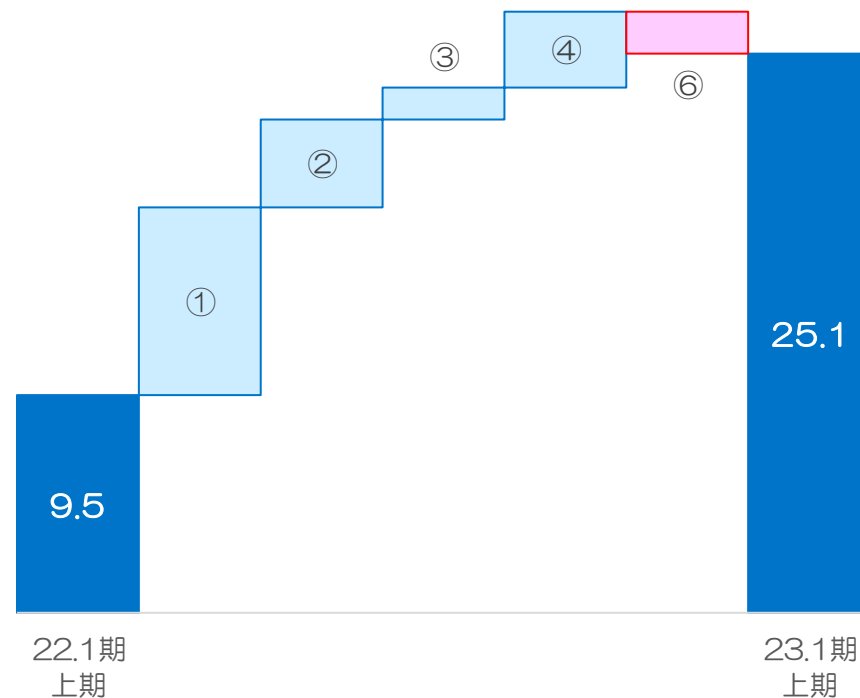
<売上高>



（変動要因）

- ①：好需要を含むベースビジネス
- ②：半導体供給不足下におけるスポット案件
- ③：特定要因による一過性ビジネス
- ⑤：新収益認識基準の適用による影響

<営業利益>



（変動要因）

- ①：好需要を含むベースビジネス
- ②：半導体供給不足下におけるスポット案件
- ③：特定要因による一過性ビジネス
- ④：為替変動による影響
- ⑥：販管費の増加

上期の好業績の主な背景

半導体供給不足下における
旺盛な需要の下支え

為替変動（急激な円安進行）による
利益の押し上げ

赤字寸前(18.1期)からの改革の成果
(営業力強化に伴う案件の増加)

今後想定される環境変化は、当下期だけでなく、来期以降にも懸念

下期の位置づけ

来期（24.1期）および3ヶ年計画最終年度（25.1期）に向けた対策と備え
(3ヶ年計画の着実の実行と、アライアンス検討の加速)

[3ヶ年計画の戦略骨子]

お客様接点の拡充と深堀

独自性の追求

生産性の向上



アライアンスを含む

成長機会の検討

下期に想定・懸念される主な変化点

◎ 大口ビジネスの環境変化

(テレビ向け半導体ビジネスの反動減)

⇒ 過去2期の急拡大の勢いから落ち着く見通しに変化はないものの、上期着地等を踏まえ、年間見通しをアップデート。

(ソフトウェア関連の一部ビジネスの終息)

⇒ 期初計画で織り込み済みも、終息時期が当初予定より若干後ろ倒し。

◎ 半導体供給不足からの需給改善による需要の後退、スポット案件の縮小

⇒ 足元でも分野/製品によって潮目の変化が見られつつあり、期末に掛けて需要の後退は緩やかに進む見通し。

◎ 不透明な為替動向

⇒ 仮にフラットで推移した場合でも、上期比ではマイナスに寄与見通し。

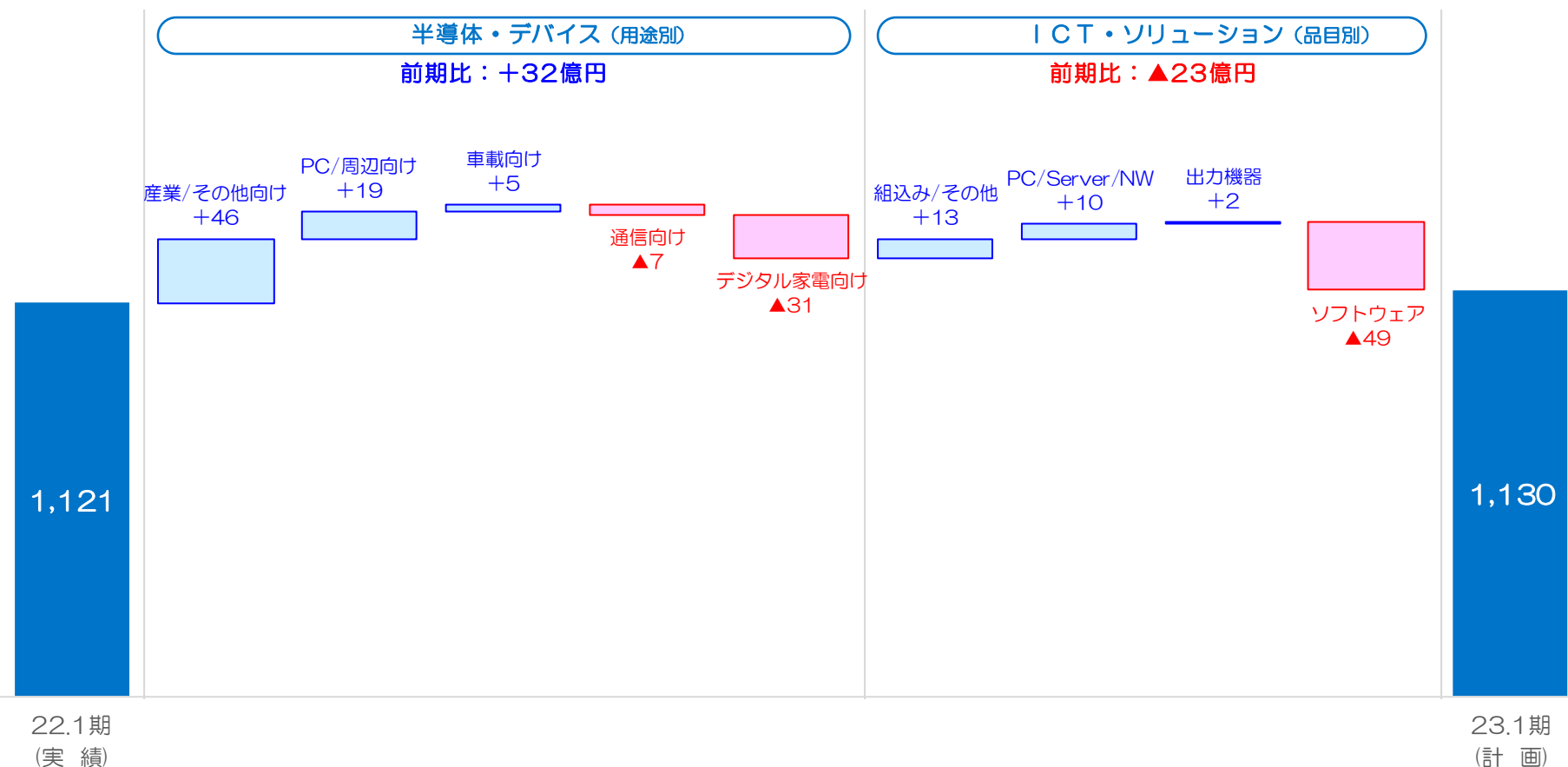
2023年1月期 通期の計画

上期着地や足元の事業動向等を踏まえ、期初計画から上方修正
～ 営業利益は過去21年間における最高水準を見据える ～

- ◎ 売上高は当初の減収計画から、前期並み（微増収）の見通しへ上方修正。
- ◎ 営業利益、経常利益、当期利益は、上期時点で期初計画を超過し、計画を引き上げ。

(単位：億円)	22.1期 年 間 (実 績)	23.1期		対 前期		対 期初計画	
		年 間 (期初計画)	年 間 (修正計画)	増減額	増減率	増減額	増減率
売上高	1,121	1,000	1,130	+9	+0.8%	+130	+13.0%
売上総利益	107.3	108.0	123.5	+16.2	+15.1%	+15.5	+14.4%
(率)	9.6%	10.8%	10.9%				
販管費	84.7	85.0	87.5	+2.8	+3.2%	+2.5	+2.9%
営業利益	22.6	23.0	36.0	+13.4	+59.4%	+13.0	+56.5%
(率)	2.0%	2.3%	3.2%				
経常利益	24.0	22.0	34.0	+10.0	+41.6%	+12.0	+54.5%
親会社株主に帰属する当期純利益	18.7	15.3	23.5	+4.8	+25.4%	+8.2	+53.6%
ROE	4.7%	3.6%	5.4%				

- ◎ 半導体・デバイスは、先行きの不透明感が色濃く残る状況にはあるものの、上期の好況により、産業分野やOA機器などのPC周辺機器向けを中心に増収見通し。
- ◎ ICT・ソリューションは、ソフトウェアに大口ビジネス終息の影響が生じるものの、その他の品目に関しては、引き続き堅調な推移を見込む。



<補 足> 品目別の状況

半導体・デバイス

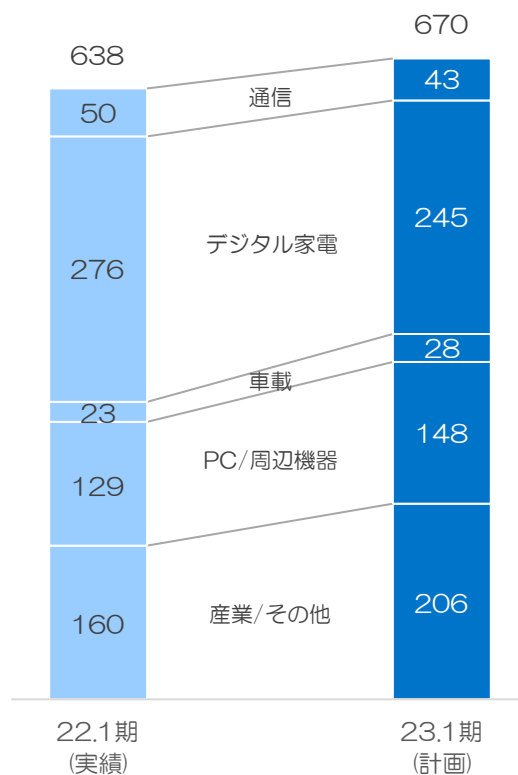
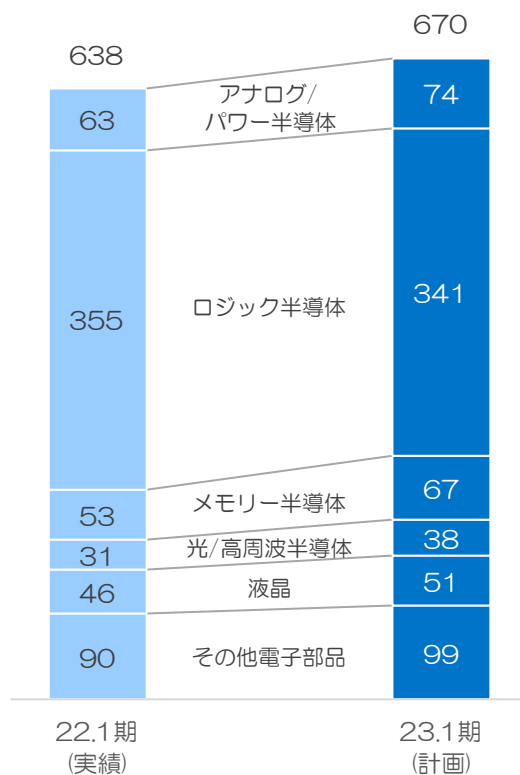
ICT・ソリューション

23.1期 (計画)	670 (59.3%)	460 (40.7%)	1,130
	+5.0%	▲4.8%	
22.1期 (実績)	638 (56.9%)	483 (43.1%)	1,121

半導体・デバイス

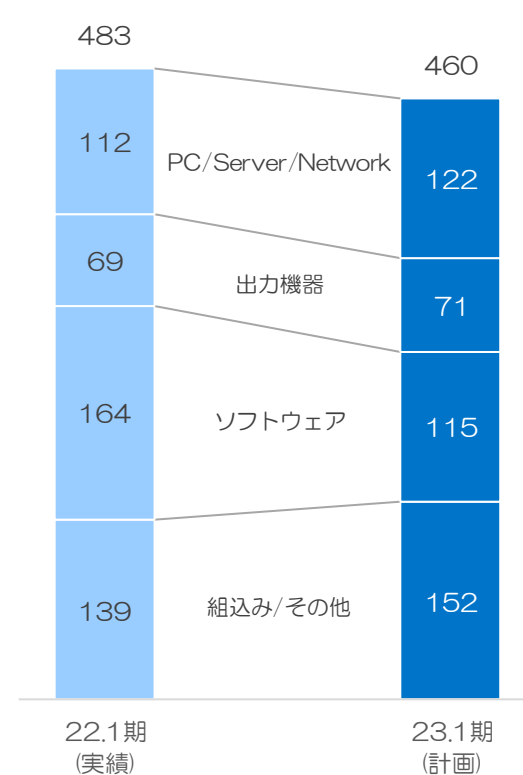
<品目別>

<用途別>



ICT・ソリューション

<品目別>



◎ 還元の基本方針：DOE（純資産配当率）5%を目安とした配当の実施

⇒ 業績見通しを勘案し、**期末配当は期初計画から10円/株を上乗せ（増配修正）。**

		1株当たり配当金			配当性向	DOE
		Q2末	期 末	年 間		
23.1期	（修正計画）	50円	60円	110円	94.3%	5.0%
	（期初計画）	50円	50円	100円	129.7%	4.8%
22.1期	（実績）	60円	60円	120円	115.4%	5.6%

【修正後の「業績予想」および「配当予想」に基づく各指標の見込み】

ROE
5.0%超

配当性向
100%未満

DOE
5.0%

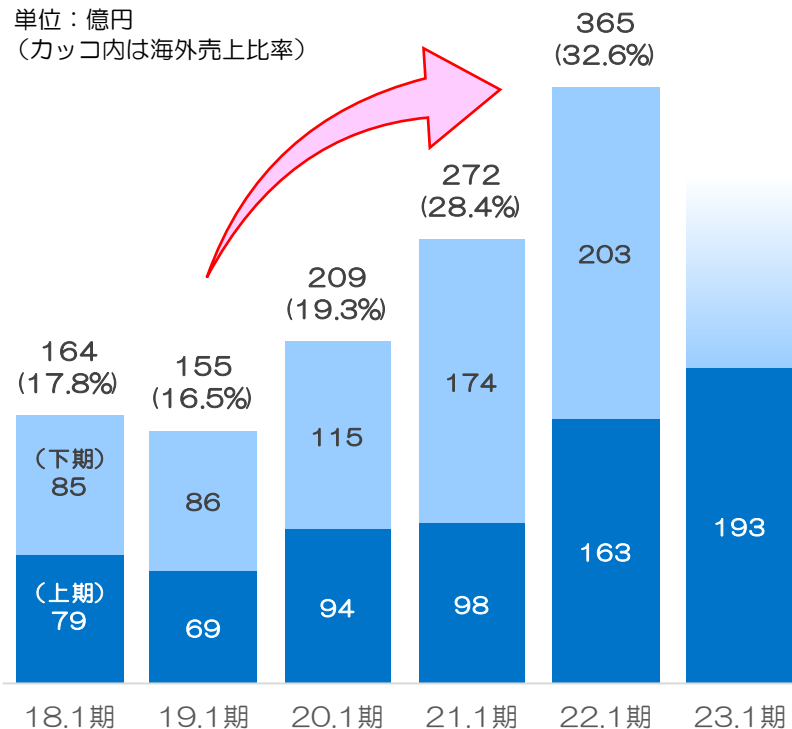
トピックス

- ◎ 国内市場の成熟、日系メーカーの生産海外シフトなどの背景に加え、中華圏エリア中心に地場客先向けの「海外独自ビジネス」の開拓・拡大も相まり、海外ビジネスが近年の半導体・デバイス関連の拡大を牽引。

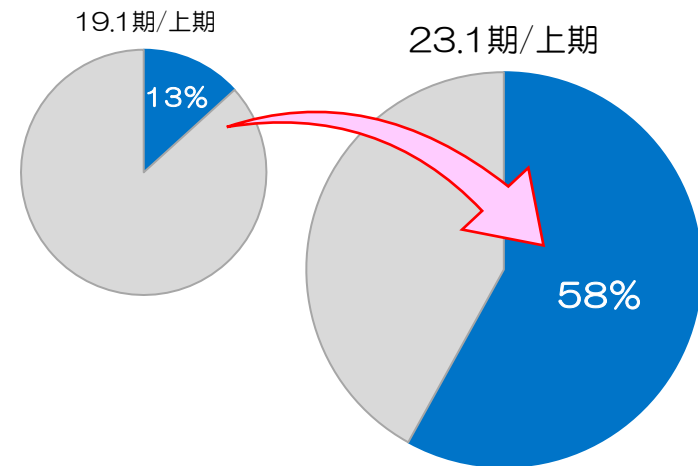
- ・ 22.1期の海外売上高は19.1期と比べると倍増以上、海外比率も3割超へ
- ・ 23.1期の上期は、前年同期を大きく上回る水準で着地

＜海外売上高の推移＞

単位：億円
(カッコ内は海外売上比率)



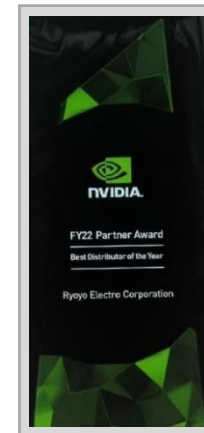
＜海外ビジネスにおける海外独自ビジネスの割合＞



- ・ 主力のテレビ向けビジネスは納入客先数増加。
- ・ テレビに加えて、スマホなどの他アプリケーションでも地場客先への採用が拡大。

◎ NVIDIA社より、No.1代理店としてアワードを受賞（2022年6月）

高精度な画像処理が求められる「医療（X線・CT・MRI等の画像診断）」や
「製造業（外観検査や作業工程の監視）」に向けた取り組みのほか、
専任のサポート体制やお客様との関係構築・リレーションなどが評価され、
「Best Distributor of the Year」を受賞。



◎ 国内代理店として、最多の製品ラインナップへ拡充

このたび製品ラインナップを拡充し、国内で最も多くのNVIDIA製品を取り扱う代理店として、
更なる市場・ニーズの開拓とビジネス拡大を推進。

RTX / Quadroシリーズ

（グラフィックスカード）



Jetsonシリーズ

（組込みプラットフォーム）



DGXシリーズ

（AIスーパーコンピュータ）



データセンターGPU

（DC/サーバー向けGPU）



vGPU

（仮想GPUソフトウェア）



NVIDIA Networking

（IBMELLANOX製品）



NVIDIA Omniverse Enterprise

（仮想化プラットフォーム）



NVIDIA AI Enterprise

（データ分析ソフトウェア）



新たに
取り扱いを開始

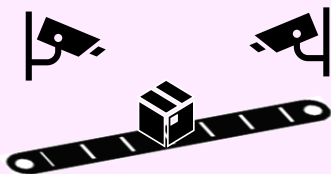
- ◎ アイシンと連携し、同社の工場（製造ライン）において、
“AI × コンテナ技術” を駆使したIoTマネジメント環境を構築。



スマートファクトリーの実現に向けた取り組みの一環として
「人手不足」や「技術伝承」などの課題解決に向けた製造現場におけるDXを推進

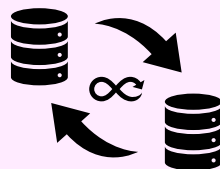
目視検査の自動化

（取付ミス、部品欠品、不良部品を検知）



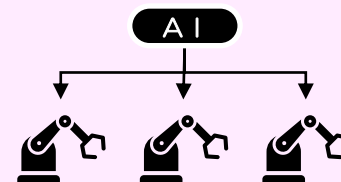
止まらないライン

（ソフトウェア起因によるライン停止の回避）



AI実装の一括管理

（現場の担当者だけでも導入できる環境）



- ◎ 当社では、社員が仕事と子育てを両立しながら、健康に働くとともに、出産や育児・介護などの生活の変化においても就業継続ができる職場づくりに取り組んでおります。
- ◎ これらの取り組みの一環として、このたび「くるみん」認定を取得いたしました。



※「くるみん」とは：次世代育成支援対策推進法に基づき、社員の仕事と子育てに関する行動計画を策定し、その旨の届け出を行った企業のうち、計画に定めた目標を達成し一定の基準を満たした企業が、申請によって認定を受けることができる制度です。

当社グループでは、引き続きワークライフバランスの推進を重要な経営課題と位置付け、社員が自らの力を最大限に発揮し、活躍できる職場づくりに取り組んでまいります。

<上期の概況>

- ◎ 半導体関連中心に引き続き好需要に下支えされ、売上高・各利益ともに大きく伸長。
- ◎ 営業利益・経常利益・四半期純利益は、前期実績から倍増以上の水準で着地。
（上期時点で、年間の期初公表値を達成）

<通期の見通し>

- ◎ 売上高、各利益ともに年間の業績予想を上方修正。
- ◎ 修正後の営業利益計画は、過去21年間で最高水準を見据える。
- ◎ ただし、先行き不透明感が依然として強く、対上期比では減速を見込む。

<その他>

- ◎ 当下期は、来期以降を見据えた備えと対策に重点着手。
- ◎ 株主還元に関しては、「DOE：5%」を目安とする基本方針に基づき、期末の配当予想を10円/株増配。

● 注意事項

本資料内の業績および将来に対する見通しは、
当社が発表時点で合理的であると判断する一定の前提に基づいており、
実際の結果は経済環境やその他の様々な要因により、
当初の見通しとは異なる可能性がありますことを予めご承知おきください。

— 本資料に関するお問い合わせ先 —

菱洋エレクトロ株式会社

企画本部 広報部

TEL : 03 (3546) 6331 E-mail : irmanager@ryoyo.co.jp

RYOYO

すべてを、つなげよう。技術で、発想で。